

## 4 埋蔵文化財調査から見た大和田新田の原始・古代の姿

巖 由美

### 1. はじめに

大和田新田は八千代市の戦後の歴史の中で、高津新田と並んで、最も早くそして大きく変貌した地域である。

高津新田では昭和 32 年(1957)、千葉県住宅協会により、八千代台に全国初の住宅団地が誕生したが、続いて昭和 37 年(1962)、八千代工業団地が、大和田新田の長兵衛野から米本道にそって麦丸台に伸びる大きな舌状台地の中心部に、内陸型工業団地として県下でもいち早く造成された。

『史談八千代』第 31 号 (p27) でも述べたように、大和田新田と隣村の村境は谷の真ん中ではなく大和田新田側の台地斜面下にあり、その下の水田は、隣接する中世からの古い村(北東は吉橋村、南西は高津村、東は萱田村)の所有で、「新田」といっても延宝年間に村立てされた大和田新田・高津新田は、ともにわずかな田圃しかない。

成田街道沿いの民家とその屋敷林や隣接する畑、近代に盛んになった酪農用の牧場を除くと、大和田新田の広い台地のほとんどが小金牧に接した芝地や山林で、その姿は戦後すぐには変わらなかった。高度経済成長期に開発のターゲットになったのは、まずはこのような台地上の山林であった。

その後八千代市では、平成 8 年(1996)の東葉高速鉄道開業に伴う開発が長期間続行されたが、特に大和田新田地区では、東葉高速鉄道開通と緑が丘駅周辺の再開発に伴い、大規模な発掘調査が行われ、重要な報告書が、千葉県文化財センターと八千代市西八千代遺跡群調査会などにより、複数刊行されている。

これらの報告書の示す内容は、先史時代からの地域史であるとともに、同時に開発の現代史でもある。この膨大な報告書の山を紐解きながら、埋蔵文化財の調査の歴史と、その調査結果に基づく原始・古代の大和田新田の姿、すなわちその地理的特徴と人々の生活の足跡を追ってみたい。

### 2. 大和田新田の遺跡と埋蔵文化財調査の歴史

八千代市で全域にわたる遺跡分布調査が開始されたのは昭和 45 年(1970)である。最も早いこの時期の報告は八千代高等学校史学会により行われた遺跡分布調査で、昭



ライノ作南C地点の調査風景 06.12.23

大和田新田では現在でも開発に伴う発掘調査が続く

和 45 年の千葉県教育委員会編「千葉県記念物所在地図」の遺跡番号を手がかりに、3 年間にわたって「フィールドワークでつぶさに現地を踏査」された。その調査成果は同校史学会の『史学報』第 3 号、昭和 47 年（1972）に、「八千代市（埋蔵文化財）分布表」として報告されている。大和田新田の関連では、大和田新田北端の麦丸台遺跡や南端の興真牧場南遺跡を含む土器・石器・土師器の散布地と中世以降の多数の塚の確認が行われ、その成果、特に塚群の所在報告は、今回大和田新田総合調査でも有効であった。

その後、昭和 25 年制定された文化財保護法の昭和 50 年（1975）改正により埋蔵文化財関係制度が拡充強化されるようになり、折からの高度経済成長に伴って緊急発掘調査が相次いで行われるようになった。

昭和 58 年（1983）には八千代市教育委員会で市内遺跡分布地図と地名表が、千葉県からは同文化財センターより『千葉県埋蔵文化財分布地図（1）－東葛飾・印旛地区－』昭和 60 年（1985）が発刊されている。

（現在、千葉県の遺跡に関しては千葉県教育委員会のホームページから「ふさの国文化財ナビゲーション」<http://www.pref.chiba.jp/pbbunkazai/>で、Web での閲覧ができる。）

八千代工業団地は 1960 年代に未調査のまま造成されたので、残念ながら遺跡分布図の空白地帯となっている。ただし八千代高等学校史学会によって、第三工団内の八千代製作所内に残存する畑地での縄文後期遺物の散布が、上記『史学報』に報告されているほか、造成後の工業団地の一角（長兵衛野 747）に散布していた有孔鏝付土器片を含む 600 の土器片を菅井光男氏が採集、千葉県文化財センターの藤岡孝司氏が分析し、『研究連絡誌』第 14 号、昭和 60 年（1985）にその成果を報告されている。この報告によれば、縄文中期（加曽利 E 式）を中心に、後期（加曽利 B 式・安行式）までの集落が営まれていた可能性があるとのことである。

大和田新田の発掘調査は、その南端の高津団地造成に伴って、**木戸前遺跡**と**梅屋敷遺跡**において始まった。八千代市教育長が中心となり県立印旛高等学校社会科研究会などの学生生徒も参加して発掘調査団を編成し、ともに小規模な調査が行われている。＝『千葉県八千代市木戸前遺跡発掘調査報告』昭和 51 年（1976）、『八千代市梅屋敷遺跡』昭和 54 年（1979）

一方、ゆりのき台団地造成に至る萱田地区土地区画整理事業にともなう約 100ha の大規模な萱田遺跡群発掘調査がそのころ千葉県文化財センターによって始まった。大和田新田北東部の**ヲサル山遺跡**と**坊山遺跡**は、権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡・白幡前遺跡とともに「萱田遺跡群」に包括される。昭和 53 年度（1978）の遺跡確認調査から平成 3 年度（1991）まで行われた遺跡群の調査成果は、ヲサル山遺跡をはじめ、各遺跡毎の報告書として刊行されている。＝『八千代市ヲサル山遺跡』昭和 61 年（1986）

またヲサル山遺跡に隣接する**ヲサル山南遺跡**については、昭和 62 年（1987）八千代市遺跡調査会の調査が行われ、概報\*1 が紹介されている。

東葉高速鉄道開通により再開発対象となった現在の緑が丘駅周辺には、駅北側（緑が丘一丁目）の**仲ノ台遺跡**、駅東北側（緑が丘五丁目）の**ライノ作遺跡**・**芝山遺跡**、駅の

東南側（緑が丘三・四丁目）の**ヲイノ作南遺跡**が分布していた。これらの遺跡と八千代中央駅西側（女子医大医療センター付近）の**向山遺跡**を貫通する鉄道敷設部分の調査が、千葉県文化財センターにより1987（昭和62）年度から始められ、報告書が刊行された。＝『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡』平成元年（1989）・『八千代市沖塚・上の台遺跡 他』平成6年（1994）

上記の緑が丘駅周辺の西八千代遺跡群の鉄道敷設部分以外の広い遺跡部分（**仲ノ台・芝山・ヲイノ作・ヲイノ作南・八幡藪遺跡**）については、八千代市西八千代遺跡群調査会が昭和61年（1986）から調査し、平成8年（1996）報告書が刊行されている。＝『千葉県八千代市仲ノ台遺跡・ヲイノ作遺跡他発掘調査報告書』

平成7年（1995）に、マンション予定地となった**ヲイノ作南遺跡**主要部分の調査が八千代市遺跡調査会により行われ、平成12年（2000）に報告書が刊行された。＝『千葉県八千代市ヲイノ作南遺跡発掘調査報告書』

また平成9年（1997）に、京成バラ園芸店舗改築のため、**長兵衛野南遺跡**の発掘が行われた＝『千葉県八千代市長兵衛野南遺跡発掘調査報告書』平成12年（2000）

そのほか大和田新田では、ヲイノ作南遺跡の一部、木戸前の**下船田遺跡**と**木戸前遺跡c地点**、長兵衛野南遺跡の一部（京成バラ園芸東側）、興真乳業の敷地内の**一本松前遺跡**などで八千代市教育委員会による調査が行われ、平成4年度（1992）・平成6年度（1994）・平成9年度（1997）・平成15年度（2002）の各『千葉県八千代市遺跡発掘調査報告書』にその概要が報告されている。

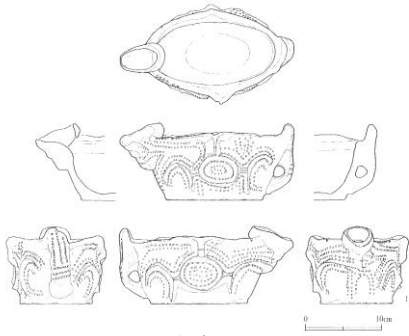
さらに、現在もヲイノ作南遺跡などでは、マンション建設などの開発に伴う発掘調査が続いており、山林と牧場、畑が織りなすのどかな大和田新田の風景は、高層住宅、大型店舗、遊興施設などの立ち並ぶ市街地に、大きく変わろうとしている。

### 3. 大和田新田の主要な遺跡の各様相（この項の出典は、2.の各報告書を参考）

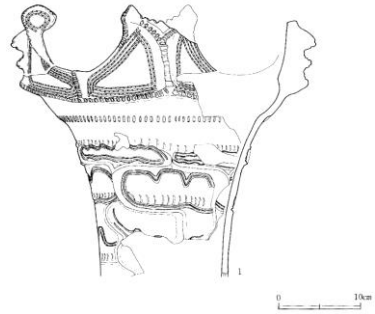
#### ①ヲサル山遺跡

- ・萱田遺跡群の一部、新川の大きな支谷である須久茂谷津に南面する台地
- ・旧石器：権現後遺跡と同一台地上の同一遺跡をみなされる。遺跡全域、そして立川ローム層ほぼ全体に文化層が及ぶことが判明、その多数の遺物集中点と豊富な内容をもつ石器群は、全国的に知られている。黒曜石は栃木県高原山産とされる。\*2
- ・縄文早期の炉穴19基、おとし穴1基、縄文中期の竪穴住居1軒、竪穴状遺構2基、土壙1基、縄文後期の竪穴住居跡3軒が検出され、遺物も早期から晩期、特に中期から後期が多数出土している。萱田地区では、坊山遺跡でも縄文住居が1軒だけ検出され、また権現後遺跡でも縄文時代の遺物が出土しているが、まとまった縄文遺構群としては、ヲサル山遺跡が唯一である。また中期の阿玉台式と思われる注口付舟形鉢形土器は、他に類型を見ない珍しい土器である。
- ・弥生終末から古墳時代の遺構・遺物多数、方形周溝墓から出土の鉄釧は長野・群馬・神奈川で出土しているだけの貴重な資料である。

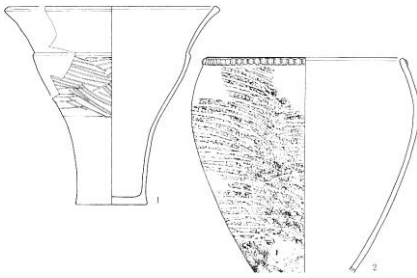
フサル山遺跡出土の遺物



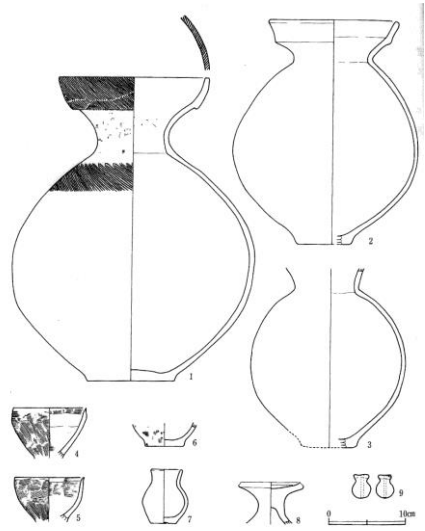
注口付舟形土器



縄文中期の深鉢（阿玉台式）

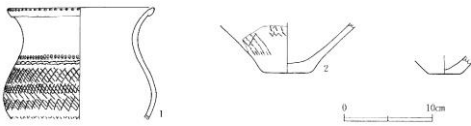


縄文後期の深鉢（加曾利B式）

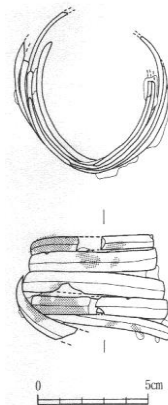
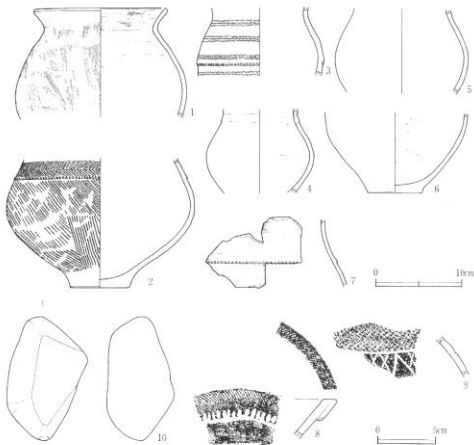


↓鉄釧 ↑ 共伴した壺・鉢・高杯

ともに古墳時代初頭の方形周溝墓から出土



弥生後期の土器・石器



## ②ヲサル山南遺跡

- ・萱田遺跡群の一部、新川の大きな支谷である須久茂谷津に東面する台地
- ・縄文中期（阿玉台期）の竪穴住居 8 軒、土壇 7 基、歴史時代の竪穴住居 4 軒を検出。
- ・遺物は、先土器時代のナイフ形石器、縄文時代の有茎尖頭器、土器片は早期の井草式から中期、後期の安行 I 式まで連続して出土。その他土器片錘など。
- ・小さな谷を隔てているが、ヲサル山遺跡とは縄文中期の同じ集落と考えられる。

## ③坊山遺跡

- ・萱田遺跡群の一部、須久茂谷津に西面する。東側を新川とその支谷の寺谷津に囲まれた台地上にある。坊山は大和田新田と萱田の境が複雑に入り組んでおり、萱田の北海道遺跡・井戸向遺跡と同じ台地上に位置している。
- ・旧石器は第 1 層～第 6 文化層まで遺物集中点 44 か所、礫を含め 3447 点の石器が出土している。第 5 文化層から環状ユニット群が、また立川ローム層 X 層に相当する第 6 文化層にも遺物集中点が発見され、この文化層は萱田遺跡群の中でも最古段階の遺跡群である。黒曜石の石材は、栃木県高原山を主体とする。<sup>\*2</sup>
- ・その他、坊山グランド南遺跡で縄文土器（阿玉台・加曾利 E 式）、坊山(三)遺跡で古墳時代の土師器（五領）などの出土遺物の簡略な報告がされている。<sup>\*1</sup>

## ④向山遺跡 A・向山遺跡 B

- ・新川の支谷である須久茂谷津の西側台地上（調査区は、東葉高速の線路部分）
- ・遺跡 A（台地の西側平坦部）：旧石器時代の遺物集中点が 2 地点（スクレーパー・剥片・焼礫片群の地点と、砂岩剥片群の地点）
- ・遺跡 B：（台地の東側平坦部）：旧石器は、剥片とナイフ形石器の 2 点のみ。時期不明の土坑 1 基と縄文前期から中期前半の土器包含層。675 点の土器片は、黒浜式・阿玉台式・浮島式が多く、中峠・諸磯などで、土器片錘 7 点（黒浜・阿玉台土器片を転用）が出土。

## ⑤長兵衛野南遺跡

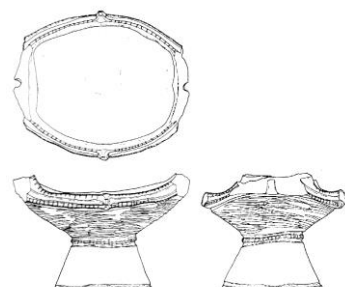
- ・桑納川南岸に至る支谷の津金谷津最奥部の台地上平坦部、京成バラ園芸東側敷地
- ・縄文中期（加曾利 E II～III 式期）の竪穴住居跡が 2 軒と同時期の遺物集中点 1 か所、溝状遺構が発見されたが、調査面積（26,800 m<sup>2</sup>）に対して遺構は希薄であった。
- ・なお、藤岡孝司氏が『研究連絡誌』第 14 号に報告している縄文中期から後期の遺物は、この遺跡に関するものと推察される。

## ⑥芝山遺跡

- ・西八千代遺跡群の一部、桑納川の吉橋付近から南側に入り込む花輪谷津の谷奥東側台地で、現在東葉高速鉄道車庫と引込み線用地になっている北西側斜面は、千葉県文化財センター（以下、「県」と略す）の調査区、その南西側斜面と台地の一部が八千代市西八千代遺跡群調査会（以下、「市」と略す）の調査区。
- ・県調査区で、先土器時代の環状ブロック 2 ヶ所。有舌尖頭器、石器石材の接合資料など

検出。集団で石器製作を行ったとみられる。

- ・ 県センター調査区で、竪穴住居跡（縄文前・中・後期各 1 軒）、縄文早期炉跡 2 基、縄文前・後期の土壇各 1 基、おとし穴 44 基を検出。市の調査区でも、前期黒浜式後半の住居跡が 2 軒、早期の土坑 1 基、時期不詳のおとし穴 5 基、他 3 基土坑を検出している。西斜面に湧水箇所多く、おとし穴を使った狩場に適する環境だったと推定される。
- ・ 遺物は、県の調査区の土壇覆土中に前期黒浜期の貝層（アサリ・ハイガイ・オキシジミ）。縄文後期住居跡の床面から加曾利 B 式の器台付き楕円形鉢形土器が見つかっている。包含層からは縄文早期から後期安行式までの土器群が出土、特に前期末から中期初頭の数量が多い。
- ・ 平安時代竪穴住居跡は県の調査区で 8 軒、製鉄跡（平安） 1 基、工人集団が一時的にいたらしい。市の調査でも同時期の住居 1 軒と墓坑とみられる土坑 1 基が見つかっている。



芝山遺跡出土の縄文後期  
器台付き楕円形鉢形土器  
(加曾利 B 式)

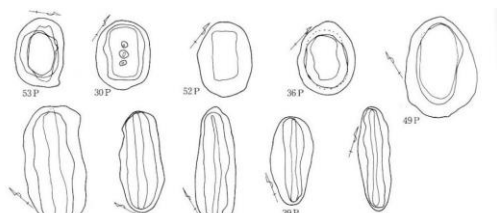
#### ⑦ヲイノ作遺跡

- ・ 仲ノ台遺跡から谷を隔てた東側、芝山遺跡に隣接する東南の台地。現在は緑が丘駅東側の線路と市街地。
- ・ 旧石器は、県調査で、メノウの石核ほか砂岩の剥片、礫など 23 点を検出している。
- ・ 縄文時代の遺構は、市調査で、早期の炉穴 5 基、同ピット 1 基、前期黒浜式期の住居跡 1 軒、後期加曾利 B II 式期の住居跡 1 軒、時期不詳のおとし穴遺構 3 基。県調査区でも、おとし穴 1 基を検出している。遺物は、市の調査で 130 点程度。加曾利 B II 式期の住居跡からほぼ完形の波状口縁丸底浅鉢や蜂の巣石などが出土、遺構外から、土製けつ状耳飾りの半欠けが 7 点、磨製石斧など興味深い遺物がみつつかっている。

#### ⑧ヲイノ作南遺跡

- ・ ヲイノ作遺跡南側の最も谷奥の台地。マンションの建設など住宅の開発が盛んで、今でも八千代市教育委員会の調査が続いている。
- ・ 遺構外や覆土中から黒曜石の尖頭器や細石刃、石英の剥片、流紋岩の礫など 17 点を石材や形態的な特徴から、旧石器遺物とした。

- ・ 縄文時代前期の黒浜式中～新段階の住居跡 20 軒、ピット 21 基を検出している。
- ・ ピットは、用途不明 6 基のほか、15 基はおおむね前期黒浜式のおとし穴である。出土した土器片から、長細い楕



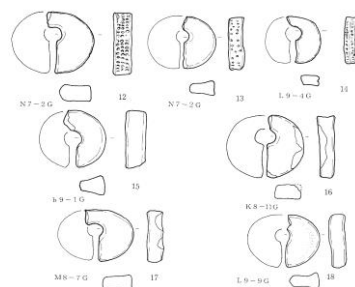
ヲイノ作南遺跡のピットの形態別集成

円形が古く、黒浜式古段階でやや丸みを帯び、中期加曾利E式では隅丸長方形で平坦な底辺となることが報告書で考察されている。

- ・遺物は、早期条痕文系土器～後期加曾利B式まで諸型式が出土、なかでも前期中葉黒浜式土器が主体的となっている。
- ・土製品は、土製円盤、土器片錘、ミニチュア土器など。
- ・住居跡覆土中に小規模なマガキの貝層がある。3～4cmの小さなマガキがほとんどで、若干のハマグリ、サルボウ、ウミニナを含む。魚獣骨は含まず、黒浜式土器細片を検出する。
- ・底部に魚骨（マイワシ）の圧痕が残る黒浜式土器が、見つかっている。

### ⑨仲ノ台遺跡

- ・西八千代遺跡群の一部、桑納川支谷の花輪谷津の谷奥に突き出た小さな舌状台地で、山林のほか、上代牧場があった。現在は緑が駅と駅前市街地になっている。
- ・旧石器時代の遺物として、県センター調査区（台地の南側、鉄道用地部分）から、剥片の2か所の遺物集中地点が検出、遺物総数は482点。石刃生産工程がわかる良好な接合資料が3個体発見されている。
- ・縄文時代の遺構は、おとし穴・土坑が、県と市の調査区合わせて63基とたいへん多い。県調査区の10基は、いずれも幅と深さが同じで長径がその3倍前後の形をしている。台地全面にわたる市の調査区のおとし穴状ピットの21基は、楕円形と円形に分かれ、規格性はなく、混入遺物から前期以前の所産と想定される。その他の32基は、時期不明。住居跡は、市の調査区で10軒を検出、おおむね黒浜式の中葉～後半とみられる。遺構外から、土製のけつ状耳飾の半欠が7点出土している。
- ・歴史時代の遺構は、かまどのある長方形の平安時代の住居跡4軒、同時期の墓穴らしきピット2基を検出している。



仲ノ台遺跡出土 縄文時代の耳飾

### ⑩一本松前遺跡

- ・成田街道南側、高津川を南に臨む舌状台地傾斜地で、大和田新田の興真乳業の牧場跡地のa地点と東側に隣接するb地点（高津字橋土）
- ・旧石器遺物として、ナイフ形石器や使用痕のある剥片など9点。黒曜石は長野産が2点、伊豆産1点で、萱田遺跡群の高原山（栃木県）と産地が異なる。
- ・縄文時代の遺構として、長円形の深いおとし穴2基、楕円～丸形の浅い土坑12基が検出されている。遺物は少なく、黒浜式を中心にした前期～後期の縄文土器片が12点、他に須恵器片2点が出土したにとどまる。

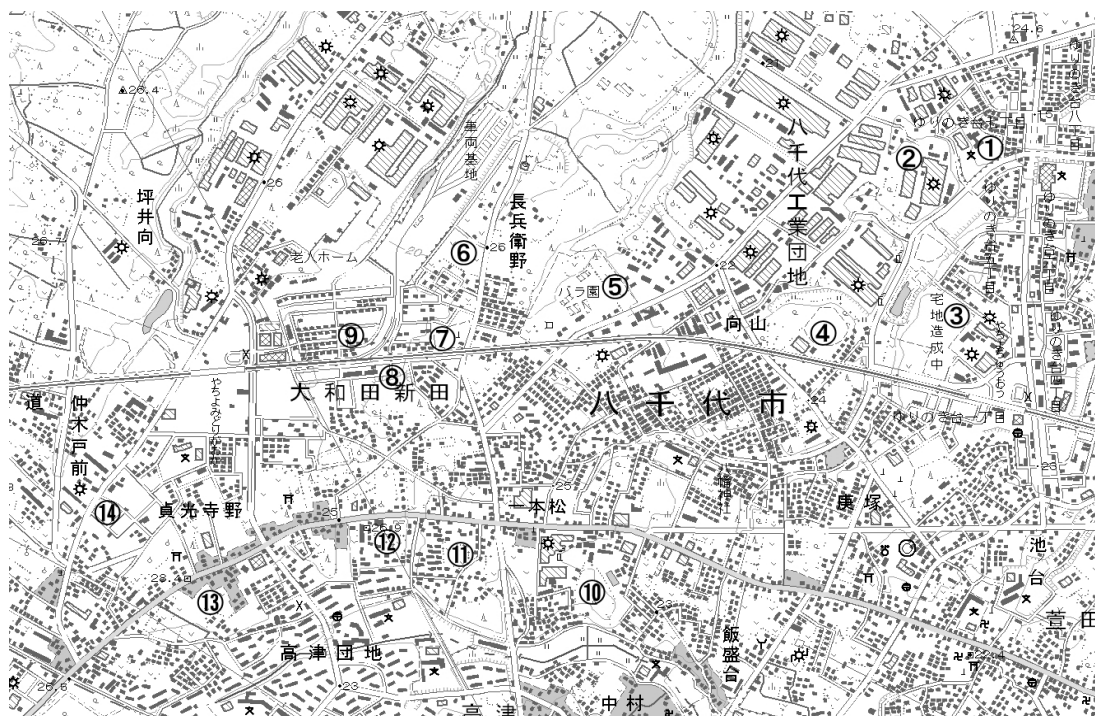
### ⑪高津梅屋敷遺跡・⑫下船田遺跡・⑬木戸前遺跡

- ・成田街道南側のいずれも高津川支谷の船田川北岸の遺跡群。

・ほとんど遺物は出土しないか、縄文中期（加曾利Eなど）の土器片が極少量出土する程度、遺構はほか全くみられなかった。

#### ⑭八幡藪遺跡

- ・成田街道北側、上区八幡神社の北裏に隣接し、南に高津川の支谷の船田川、北に桑納川支谷である花輪谷津と石神沢の谷頭、西に坪井川の谷頭から数百mの等距離にある分水界に位置する
- ・旧石器後～末期の尖頭器、縄文前期中～末期の土器片6個、縄文時代のピット1基が検出された。



大和田新田の遺跡地図

- |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|
| ①ヲサル山遺跡  | ②ヲサル山南遺跡 | ③坊山遺跡    | ④向山遺跡    |
| ⑤長兵衛野南遺跡 | ⑥芝山遺跡    | ⑦ライノ作遺跡  | ⑧ライノ作南遺跡 |
| ⑨仲ノ台遺跡   | ⑩一本松前遺跡  | ⑪高津梅屋敷遺跡 | ⑫下船田遺跡   |
| ⑬木戸前遺跡   | ⑭八幡藪遺跡   |          |          |

#### 4. 旧石器時代の 大和田新田

大和田新田の遺跡では、赤土の関東ローム層中、主に立川ローム層から旧石器時代の石器が多数出土しており、約三万年前～一万二千年前、この地にも土器をまだ作らない人々が住んでいたとされる。



この時期はウリム氷期にあたり、富士山などの火山活動が活発な時期であった。<sup>\*3</sup>

特にヲサル山遺跡・坊山遺跡・芝山遺跡・仲ノ台遺跡では、ブロック（石器が集中して出土する地点）も確認されており、その生活した場所や石器生産の状況なども想像できる。

ヲサル山・坊山遺跡の旧石器遺物の黒曜石は栃木県高原山産、また仲ノ台遺跡の接合資料は栃木県磯山遺跡に類似する黒色緻密質安山岩で、旧利根川・鬼怒川流域に形成された移動ルート为背景にした、北関東から房総半島間の石器石材の流通を想定することが可能とされる。<sup>\*2</sup>

ウリム氷期の最後の最盛期約二万年前は、氷河が発達し海水面が現在より 100m 以上も低下して、大和田新田周辺の沼や川はもとより、東京湾も陸化していたとされる。このころの人々のすみかは、近くに飲料水が得られる所に近く、食糧源である動物のうごきや植物の状況が見渡せるような稜線が最適であり、大和田新田の台地の縁はそのかっこうの場所であったと推測される。後の古鬼怒湾の一部となる現在の印旛沼周辺の低地、その草原に住むナウマンゾウやオオツノジカなどの大型獣を追って、「下野―北総回廊」を石器・石材とともに人々も行き来したのであろうか。

やがて、その時期も終わり、ワイノ作南遺跡で出土した有樋尖頭器と細石刃は、旧石器時代の最終末から縄文時代の草創期にかけての人々のくらしの一端を示す。<sup>\*3</sup>

## 5. 縄文時代の 大和田新田

氷河期の終了とともに海面が上昇する「海進」が始まり、湖沼と台地のおりなす現在の北総の地形が現れるとともに、およそ八千年前の縄文早期、ヲサル山遺跡や芝山・ワイノ作遺跡には、条痕文系土器と炉跡、狩猟のためのおとし穴を残した人々の生活が始まっていた。

その後、温暖化により海進がピークに達し、海面も 4 m 上昇する縄文前期、大和田新田の谷奥の西八千代遺跡群では、黒浜式の土器を伴った住居が多数建てられ、ムラを作っていたとみられる。黒浜式は、約六千年前の関東地方の縄文前期の土器型式名で、埼玉県蓮田市の黒浜貝塚を標式遺跡としている。

東京湾・古鬼怒湾の奥深くまで海水が入りこみ、今は内陸となった丘に貝塚を多数形成した時期で、大和田新田の谷奥にも古鬼怒湾の水が上がって、現在の東葉高速鉄道の車両基地などの低地はその水面下にあったであろう。

向山遺跡やワイノ作南遺跡でも漁網に使用した土器片錘が、また芝山遺跡ではアサリ・ハイガイ・オキシジミなど、ワイノ作南遺跡ではマガキの貝層が見つかったが、このころ海は、(現在の成田街道の稜線南側＝東京湾側も含め)比較的近い距離にあって、海の幸にも恵まれていたと思われる。また、おとし穴も盛んに作られ、狩りの獲物も豊かだったに違いない。

黒浜式のころの八千代市域の文化の中心が、市域全体の分布状況からみても、大和田新田の西八千代遺跡群、特にワイノ作南遺跡にあったと推定されることは、おとし穴の多さとともに今回の調査でわかった大和田新田先史時代の一番の特徴と思える。

やがて、装飾の豊かな阿玉台式など縄文中期の土器を作るころ、大和田新田のムラは、

徐々に桑納川支谷の谷奥から下流方面の北側台地上に広がっていく。

阿玉台式は香取市阿玉台貝塚を標式遺跡とし、関東地方東部を中心とする土器型式である。胎土中に金雲母片が混入しているため土器の表面がキラキラ輝いているのが特徴で、ヲサル山遺跡の注口付舟形鉢形土器も、ユニークな形ながらこの型式とされている。

やがて、中期後葉より気温が下がりはじめ、印旛沼の淡水化も急速に進んで、人口減が始まると、大和田新田の西八千代遺跡群もその例外ではなく、その遺物分布は散漫になり、後期前葉（称名寺式・堀の内式）の遺跡はほとんど消えてしまう。

その後、後期中葉のころ、加曾利B式の土器を伴う住居跡が芝山遺跡、ヲイノ作遺跡に見られるようになるが、後期後葉（安行1～2式）には芝山遺跡出土の土器片9点を見るだけとなる。この後期遺構の希薄な傾向は八千代市域全体でも顕著で、むしろ芝山遺跡の加曾利B式期の住居跡は、貴重な遺構といえよう。

さらに晩期になると八千代市では、印旛沼に面した佐山貝塚や、丸木舟の見つかった保品地先の大江間遺跡、川底に土器が堆積していた桑納川低地遺跡\*4などの例外を残し、大和田新田を含む下総台地上から人々の痕跡はほとんど姿を消す。

## 6. 弥生時代以降の大和田新田

大和田新田に新しい人の営みと文化が再び訪れるのは、印旛沼低地の出口が本流河川から運ばれた土砂によってせき止められて沼沢化し、水田耕作が行われた弥生時代、萱田遺跡群では、弥生時代後期を待つ。同遺跡群の権現後遺跡と隣接するヲサル山遺跡では、弥生終末期から古墳時代前期住居跡や鉄釧の出土した方形周溝墓などの遺構が展開するが、律令制の時代になると、萱田遺跡群の中でも須久茂谷津の東南側の遺跡、墨書土器をたくさん残した白幡前遺跡などにその中心が移って、ヲサル山遺跡から人の営みが消えてしまう。

一方、平安時代になると、西八千代遺跡群では、芝山遺跡や仲ノ台遺跡に住居跡や製鉄遺跡などが見られるようになる。花輪谷津などの水田、森林資源を活用した小規模な工房を営む人々が一時的に住むようになったのであろうか。

中世になると、礎石上に床のある低地でも住める構造の家屋になって、生活に便利な台地下の辺田に集落が移る。台地はまた太古の自然に帰って、山林は里山に、芝地・荒地は牧となっていったのであろう。

近世になって大和田新田は、やがて増大する人口を支えるため台地斜面も新田開発の対象になり、台地上の畑も増えていったが、成田街道沿いの集落を除くと、そこは未だ旧村同士の境界、ムラの外の異界であった。台地上に残された庚塚をはじめ多くの供養塚が、大和田新田という地が、祖霊や神霊を祀るヤマであったことを物語っているように思える。

## 7. おわりに

以上、発掘調査報告書から見た大和田新田の姿を推察してみた。

大和田新田の地理的な特徴は、北総台地上を東西に貫く成田街道と、この街道から麦丸へ、また吉橋へ向かう古道がその背稜をまっすぐに走る舌状台地である。桑納川や新

川からの支谷は、吉橋や萱田、高津などの旧村の谷津田で、江戸時代に村立てされた大和田新田にはかろうじてその谷頭しか残されていなかった。

湖沼や河川から最も遠く、漁労も水田耕作からも、また水上交通からも縁遠かつたろうこのような台地上は、人々の生活に長い間不向きであったと思われるが、先史時代は、地球規模の大きな気候変動の中、海退と海進という環境地形の変化に適応して、意外にも、人々の生活の痕跡が多く残されていたのである。

また大和田新田の調査された遺跡群を、以下のおおむね3群に整理してみると、それぞれ特徴を持つこともわかった。

- ・Ⅰ群＝萱田遺跡群の西部分、須久茂谷津中～上流の遺跡群 ①～④
- ・Ⅱ群＝西八千代遺跡群、桑納川南岸に至る支谷の津金谷津最奥部と花輪谷津の上流～谷頭の遺跡 ⑤～⑨
- ・Ⅲ群＝高津川支流の船田川北側の遺跡群 ⑩～⑭

先土器時代と縄文早期の遺物に、Ⅰ群とⅡ群に大きな差は見られず、ともに豊富な内容を持つ。

縄文前期の海進によってⅡ群は、黒浜式期に市域の中心的な遺跡群となるが、縄文晩期をもって遺構が絶え、一方、Ⅰ群では萱田遺跡群の一部として、弥生後期から古墳時代の遺跡が再帰する。

また印旛沼水系からも東京湾側水系からも最も遠い分水界にあり、台地の南斜面の傾斜が北斜面に比べて急で水利用に困難なⅢ群は、Ⅰ群Ⅱ群に比べ、極端に遺構遺物が少ない、等々。

そのほか、発掘調査報告書は地域の歴史について多くのことを物語るが、調査に投じられた労力や経費に比べ、地域を学ぶ市民に資料として充分活用されていないように感じる。活用したくても、手近な図書館や博物館の資料室に必ずしも全てそろっていないのが、現状であった。

調査報告は、遺跡を破壊する代償に未来の市民に遺された貴重な資料である。今回のレポートは、その資料群を地域に還元するささやかな試みである。

なお最後に、本文をまとめるに当たり、ご指導いただいた八千代市教育委員会の常松成人氏に心からの謝意を表します。

その他の参考資料（本文中に明記した調査報告書資料は省略）

- \*1 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』平成3年（1991）
- \*2 『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県史料研究財団
- \*3 『赤土の中の文化～八千代市域の旧石器文化～』1999 八千代市歴史民俗資料館
- \*4 「桑納川川底から発見された土器について」常松成人『資料館だより』第86号 平成18年（2006）船橋市郷土資料館